

国立国会図書館国際子ども図書館

選書用ブックリスト(アイルランド)に係る報告書

平成 22 年 12 月

アイルランド児童書選書にかかわる調査報告書

平成 22 年 12 月 22 日

報告者：静岡大学情報学部教授

森野 聡子

(1) 国際子ども図書館の所蔵資料の評価、所見

同館が所蔵しているアイルランド関係の蔵書リストを調査したところ、児童書については約 200 件あった。そのうち 100 件ほどが 1980 年代から 90 年代にかけて出版されたゲール語書籍であることを評価する。ゲール語児童書は絶版が多く、今回の調査でも 2000 年以前のものについては書誌情報すら不明なものがかなりの点数あった。国立の資料・情報センターとしての役割を考えると、このような少数言語の出版物は今後も定期的に収集していくことが望ましい。その意味では、逆に 2000 年以降のゲール語児童書が少ないことが問題として指摘できる。英語の児童書は 1995～2005 年までの出版物が充実している。

アイルランドに関する資料については基本的なレファレンス資料が不足している。子ども向けに再話されることが多いアイルランドの伝承物語やフォークロアに関する事典・解説書類のほか、アイルランドにおける宗教や民族対立、紛争、移民などの背景知識を提供するものとして、標準的な歴史書等が必要である。

以上のような観点から、今後の資料収集においては、①2000 年以降のゲール語・英語による児童書 ②アイルランドの歴史・文化・伝承等に関するレファレンス資料の 2 点を中心にすべきであると考えます。

(2) アイルランドにおける主要な児童書賞の情報(主催団体、受賞の対象、受賞者一覧)

アイルランドにおいてもっとも代表的な児童書賞は 1990 年に創設されたビスト児童文学賞(The Bisto Book of the Year Awards/Duaiséanna Leabhair na Bliana Bhisto)である。これは 1989 年に創立された The Irish Children's Book Trust (ICBT) が食品会社 Bisto をスポンサーに主催したもので、現在は ICBT と The Children's Literature Association of Ireland (CLAI, 1987 年創立) が合併してできた Children's Books Ireland (Leabhair Pháistí Éireann: CBI) によって運営されている。以下、CBI の公式サイト(http://www.childrensbooksireland.ie/index.php?option=com_content&task=view&id=125&Itemid=334)より、賞の概略を紹介する。入賞者については付属資料に示した。

ビスト児童文学賞は毎年 3 月にノミネート作品(ショートリスト)が発表され、5 月に受賞作品が公表される。選考対象は、アイルランドの市民権を有するか、アイルランドに居住する作家・イラストレーターによる子どもとヤング・アダルトを対象とした書籍(英語およびゲール語)である。賞部門は 2010 年現在、以下のとおり。

- ① The Bisto Book of the Year Award (Leabhar-Ghradaim Bisto) : 賞金 1 万ユーロ
- ② The Eilís Dillon Award (アイルランドの児童文学作家 Eilís Dillon にちなんで作られた賞で、児童文学の新人に贈られる) : 賞金 3 千ユーロ

- ③ The Bisto Judges Special Recognition Award
- ④ The Bisto Honour Award for Illustration
- ⑤ The Bisto Honour Award for Writing

(Honour Awards は Merit Awards が 2006 年度より名称変更されたもの)

その他の賞としては、The Reading Association of Ireland(Cumann Léitheoireachta na hÉireann: RAI、1975 年創設)主催によるアイルランド読書協会賞 (The RAI Children's Book Awards 隔年)、ゲール文化祭 (Oireachtas na Gaeilge) でゲール語による児童文学優秀作品に与えられる Réics Carló 文学賞(Gradam Réics Carló) などがある。

(3) 児童書および児童関連資料の出版状況について

次にアイルランドの代表的な児童文学書出版社を取り上げる。まず英語書籍に関しては 1973 年創業の O'Brien Press (<http://www.obrien.ie/>) や Poolbeg Press (<http://www.poolbeg.com/>) などダブリンの大手出版社が健在であるが、近年特徴的なのは地方に拠点を置いたゲール語出版社の増加である。ゲール語出版は 1945 年に創立された An Gúm が政府による支援を受けて存続しているが、1980 年代半ばから西部の「ゲールタハト」と呼ばれるゲール語地域を中心に独立出版社が次々、誕生している。1985 年にコネマラで創設された Cló Iar-Chonnachta (<http://www.cic.ie/>) をはじめ、同じくコネマラにある Leabhar Breac (<http://www.leabharbreac.com/>)、メイヨーの Cló Mhaigh Eo (<http://www.leabhar.com/>)、クレアに居を置く Móinín(<http://www.moinin.ie/>)、ゴールウェイ近郊のスピダルにある Futa Fata (<http://www.futafata.com/>) などである。また、An tSnáthaid Mhór (<http://www.antsnathaidmhor.com/>) は 2005 年に創設された北アイルランドのベルファーストの出版社で、ゲール語の物語絵本を中心に活動を行っている。各出版社はそれぞれ自前のサイトを持ち、直接書籍を販売している。1990 年代以降のインターネットの普及が、これら地方の小さな出版社の活動を支えているのである。

このように一見、充実してきたかに見えるゲール語児童書であるが、問題もある。大半が初学者用の絵本や副読本的書籍で、それに続くものが乏しい点だ。ゲール語はアイルランドの第一公用語 (英語は第二公用語) で、ゲール語学習は学校の必修科目であることから、学習用の出版物は隆盛である。けれどもゲールタハトを除けば、ほとんどの子どもは学校以外でゲール語を使うことがない。したがって、せっかくゲール語が読めるようになっても、年長になれば英語の本に移ってしまう。実際、アイルランドの書店の児童書売り場で人気を誇るのは「ハリー・ポッター」など、英語で書かれた国際的ベストセラーである。日常的な読書習慣につなげるためにも、ゲール語でしかできない表現と内容を備えた良質な児童文学が求められている。

その意味で、キルケニーに拠点を置くアニメ・イラストスタジオ Cartoon Saloon (1999 年設立)のメンバーによるゲール語のコミック出版は興味深い。コミックといっても素材はアイルランドの伝承物語で、フルカラーのイラストは子どもも大人も惹きつけるクオリティを持っている。1999 年の設立以来、手がけた作品がビスト児童文学賞に立て続けにノミネートされた。最近では、*The Secrets of Kells* が 2009 年度アカデミー賞長編アニメーション映画部門にノミネートされ話題を呼んだ。

(4) アイルランドの児童書の特徴

アイルランドは12世紀以来、隣国イングランドの干渉を受け続け、20世紀になってようやく独立を果たしたという歴史を持つ。その間、アイルランド固有の伝統・習俗、ゲール語文化やカトリックの信仰の抑圧が続いただけでなく、連合王国からの独立をめざす抗争、そしてアイルランド内での武力対立による多くの犠牲が生まれた。そのことが、アイルランドの児童文学に特有な「語り」を生んでいる。

まず気がつくことは、伝承物語の子ども向け再話や伝承からモチーフや登場人物を借りた作品が非常に多いことである。たとえば、伝説の英雄クー・ホリンやフィン・マク・クウィル、妖精レプラコーンらは今でも児童文学の人気キャラクターだ。

19世紀末、アイルランドでは民族運動と呼応して文芸復興が起こった。けれども、イングランドの支配下でゲール語文学の発展は望めず、結局、アイルランド固有の文学として再発見されたのが中世のゲール語説話や民間伝承だった。アイルランドというと妖精と伝承の国というステレオタイプはここに起因する。そのことが、昨今のファンタジー・ブームとあいまって、日本におけるアイルランド児童文学の翻訳紹介の傾向に偏りを生んでいるという事実も指摘したい。

アイルランド児童文学におけるもう一つの重要な要素は「記憶」である。19世紀半ばにアイルランド社会に大打撃を与えたジャガイモ飢饉、それに起因するアメリカやオーストラリアなどへの出稼ぎ・移民による家族離散、連合王国からの独立運動と1916年の復活祭に起きた独立派のクーデター、それに続くイングランドとの戦争。そして1921年の和平協定による南北分離。北アイルランドを連合王国に残すというこの決定は、アイルランド共和国樹立後も北アイルランド紛争という形で傷跡を残した。

これらの出来事は、時間的にも空間的にも現実と遠く隔たった「伝承」の世界とは異なっていて、祖父母の思い出話、写真などの形で家族のレベルでも共有されている「集合的記憶」である。こうした民族的トラウマを子どもに伝えることの困難さは想像に難くない

実際、作品を見ると、19世紀の飢饉や移民を取り扱ったものは比較的早くから登場するが、**The Troubles** と呼ばれる北アイルランド紛争を直接テーマにしたものは少ない。北アイルランドでは、1970年代から、共和国との合体をめざすカトリック系住民と連合王国への帰属を望むプロテスタント系住民の武力組織のテロが激化。また独立派と連合王国政府との対立も流血を生んだ。1972年1月には、政府軍が公民権を要求するカトリック系市民のデモ隊を狙撃するという「血の日曜日事件」がデリーで起きる。また、1980年から81年にかけては、独立派の囚人が「政治犯」としての認知を求めてハンガーストライキを行い死者が出た。1980年代はサッチャー政権に抗議した爆弾テロがニュースをにぎわす。

こうした、あまりにも生々しい「記憶」が、児童文学の中に再現される転機となったと思われるのが、1998年4月10日の「グッドフライデー合意」である。ブレアの労働党政権の地方自治政策とアメリカの調停により、長らく待ち望まれていた停戦がようやく実現する。その後、IT立国として「ケルティック・タイガー」の異名をとるほどの好景気に見舞われたことも、過去のトラウマを直視する強さを作家に与えたと思われる。

注目されるのが、多くの作品が紛争を直接は描かず、舞台を外国に設定して、宗教や民族の対立の悲劇を描いている点だ。オランダにおけるプロテスタントとカトリックの対立

を素材にした *Wings Over Delft* (2003)、ナチス時代のドイツを舞台にした *The Boy in the Striped Pyjamas* (2007)、カシミール紛争を扱った *Chalkline* (2009) などである。また *Bog Child* (2008) は、1980年代のアイルランドの「いま」と「過去」をパラレルワールドとして表現するという手法をとっている。

「歴史」が起こったことを記録するものであるとするならば、「文学」は起こったかもしれないことも語りうる。このような語りの工夫によって、21世紀のアイルランド児童書は、北アイルランド紛争における悲惨な出来事を再生するだけでなく、いまを生きる若い命に希望や救いをもたらすという、児童文学として大切な使命を担っているのである。